

「かしこまりました」は、  
もう言わないで——高級ホ  
テルで再会した幼馴染の  
コンシェルジュに、  
敬語ごと蕩かされて朝まで  
離してもらえませんか

指先が耳朶に触れた瞬間、背筋が甘く痺れた。

「失礼いたします。——お髪が、まだ濡れていらっしゃいましたので」

低い声が鼓膜をなぞる。ダークネイビーのスーツ、金の鍵の徽章、完璧な微笑み。——バスローブ一枚の私に向けられるその手つきは、ホテルマンのものなのに、どこか切なく丁寧すぎた。

二十分前まで、泣いていた。

金曜の夜、雨に濡れたトレンチコートのまま飛び込んだ高級ホテルのロビーで、私はまだ涙の跡を拭えていなかった。三年がかりの大型案件を上司に奪われた。悔しさすら通り過ぎた虚しさの中、帰りの電車で衝動的に予約した一泊。自分へのご褒美——そんな言葉を自分に許すのにさえ罪悪感がある。三十歳、法人営業主任、藤堂瑠衣。口癖は「大丈夫」と「自分でやります」。

フロントで名前を告げ、三十二階のデラックスルームに通されたとき、窓の向こうの東京タワーが雨に滲んでいた。ストッキングを剥がして、靴擦れの沁みる足裏にため息をついて、シャワーを浴びてバスローブに袖を通した。クローゼット横の姿見に映った自分の顔が、思ったより曇っていた。目の下のクマ。乾いた唇。いつからこんな顔で働いてきたんだろう。

ノックの音がした。ルームサービスを頼んだ覚えはない。ドアを開けると、ロビーで一瞬だけ目が合ったコンシェルジュが、シルバーのトレイにホットミルクとラベンダーのサシェを載せて立っていた。

「藤堂様。お疲れのご様子でしたので——安眠にお役立ていただければと」

頼んでいない。なのに、今いちばん欲しいものが来た。

喉の奥が詰まって、声がうまく出なかった。

「……ありがとう、ございます」

受け取ったマグカップの温度が掌に広がったとき、涙腺が不意に緩んだ。仕事中は泣かなかった。電車でも堪えた。なのに、たった一杯のホットミルクに——見知らぬ人の「お疲れのご様子」という一言に、蓋が外れかける。

名札が目に入った。

Chief Concierge 神代 柊。

——かみしろ、しゅう。

指先が震えた。

十五年前。都営団地の隣の部屋に住んでいた男の子。眠れない夜にお母さんのホットミルクを飲んでいて私を知っている、ただ一人の男の子。引っ越しの前日、公園のブランコの前で泣きながら「大人になったら、るいのことは俺が守る」と言った、あの——

「……しゅう、くん？」

完璧な微笑みが、一瞬だけ揺れた。そしてすぐにコンシェルジュの顔に戻る。

「お気づきになりましたか。——お久しぶりです、瑠衣さん」

「藤堂様」ではなく、名前と呼ばれた。それだけで胸の芯が焼けるように疼いた。

「……いつ気づいたの」

「チェックインのお名前を拝見した時に。正確には——ロビーにお入りになった瞬間に」

「じゃあ、このホットミルクも——」

「小学生の頃、瑠衣さんは眠れない夜にお母さんのホットミルクを飲んでいらっしやった。……覚えていましたので」

十五年前のことを、この人は覚えている。

あの頃ひょろひょろだった男の子が、スーツの似合う長身の男になっていた。手が大きい。肩幅が広い。声が低い。でも微笑むと下がる目尻だけはあの頃のままだ。

部屋に留まった柊が、濡れた私の髪にタオルを当てた。「失礼いたします」と囁いて、毛先から丁寧に拭く。美容師みたいな手つきだけど、もっと近い。指先から伝わる体温が、もっと甘い。

「……自分でできるよ」

「存じております。ですが今夜は、ご自分でなさらなくて構いません」

その一言が、刺さった。

二十年間、全部自分でやってきた。仕事も、家事も、体調管理も。誰かにやってもらうことを自分に禁じてきた。「大丈夫」「自分でやります」。それが大人だと思っていた。

なのにこの人は「やらなくていい」と言う。命令ではなく、許可として。

タオル越しに頭を包まれて、子供の頃に戻ったみたいだった。

「しゅうくん」

「はい」

「……あの頃の約束、覚えてる？」

短い沈黙。

「——はい。大人になったら、るいのことは俺が守る、でしたか」

「……覚えてるんだ」

「忘れたことはありません」

タオルの手が止まる。指先が、髪を通り越してうなじに触れた。  
一瞬だけ。事故のように。

たったそれだけの接触で、全身に鳥肌が立った。

触れられた場所に温度だけが残っている。首筋から鎖骨を伝って  
胸の奥まで染みていくような熱。

柊はすぐに手を引いた。タオルを畳み、一步退く。

「お髪、乾きました。——おやすみなさいませ」

帰ろうとしている。またプロの顔に戻って。

(行かないで)

そう思った自分に驚く。声には出さない。出せない。

柊がドアに手をかけ、振り返った。

「何かございましたら、内線でお呼びください。——朝まで私が担当でございます」

「朝まで」。その言葉が妙に胸の奥に引っかかった。

ドアが閉まったあと、うなじに残る指の温度を、バスローブの上  
からそっと押さえる。心臓がうるさい。身体の奥が、じんわりと、  
ほどけていくように熱い。

ベッドに潜り込んでも眠れなかった。目を閉じると、指が髪を梳  
く感触が蘇る。十五年前の約束が胸の奥で焦げるように疼いていた

。

——プロのおもてなし？ それとも。

バスローブの胸元がはだけているのに気づいて、直すのも忘れていた自分に笑ってしまう。

午前一時。起き上がって、バスルームに水を飲みに行った。

姿見に映る自分。バスローブの衿元が緩み、うなじが上気して赤い。目が潤んでいる。仕事中的「デキる女」の顔なんかどこにもない。

(……誰、この女)

鎧を全部脱いだ、剥き出しの三十歳。

内線電話を取った。震える指でコンシェルジュデスクに繋ぐ。

「……あの。眠れなくて」

「——かしこまりました。すぐに参ります」

三分も経たずにノックの音がした。柵が片手にデカンタのホットワイン、もう片手にブランケットを抱えて入ってくる。

窓際のソファに並んで座った。東京タワーの灯りが雨に滲んで、私たちの横顔をぼんやり照らしている。

ホットワインを一口。甘くて温かくて、身体の芯が蕩けた。

「しゅうくん。……あの約束のこと、もっと聞いていい？」

「引っ越しの前の日に——泣きながら言ったのは、本気だった？」

「……本気でございました。一日も忘れたことはありません」

声が低くなった。敬語は崩れない。けれど温度が変わった。

「瑠衣さんがご予約を入れてくださった日——お名前を画面で見るとき、手が震えました」

「……知ってたの？ 最初から？」

「はい。ホットミルクも、お部屋のアップグレードも——瑠衣さんがお好きだったものを覚えている限り全てご用意いたしました」

プロのおもてなしではなかった。最初から。全部、しゅうくんとしての——。

涙が溢れた。堪えられなかった。

「ずるい……。全部知ってたのに、『お客様』って……」

柊が私の頬に手を伸ばした。涙を指の腹で拭う。敬語の所作ではない。もっと丁寧で、もっと切実な手つき。

「——瑠衣さん。肩が強張っていらっしゃいます。……ずっとお一人で頑張ってこられたんですね」

見抜かれた。鎧の下を、全部。

柊の手が頬から顎へ、首筋へ、鎖骨の窪みへ降りていく。指先が止まった。

「ここも。爪にネイルがない。——ご自分を飾る時間すら仕事に差し出してこられたのではありませんか」

爪を見ただけで、二十年分の人生を読み取る。

柊の指が鎖骨をなぞった。バスローブの合わせ目に指先がかかる。胸の膨らみの手前で——止まった。

「……お望みでしたら、この先も」

「っ……」

「ただし——お客様からお申し付けいただかなければ、私からは」

「お客様」。その一言で現実に戻される。客とコンシェルジュ。  
十五年のブランク。

身体が強張った。柵がすぐに手を引く。

「失礼いたしました。——出過ぎた真似を」

ソファから立ち上がった柵が、距離を取る。

私はバスローブの胸元を掻き合わせながら、身体の奥が疼いているのを自覚していた。鎖骨に残る指の感触が消えない。あの一瞬で、もう——。

「瑠衣さん。私は——職業倫理に反することは、自分からはいたしません」

「……うん」

「ですが、お客様がお望みでしたら——全てのご要望にお応えいたします」

分かってしまった。この人は自分からは踏み込まない。私が「お願い」と言うのを待っている。

ずるい。十五年前もそうだった。泣きそうな私の隣に黙って座って、私が泣くのを待っていた男の子と、やり方が同じだ。

「——もし、お申し付けいただけないのであれば。私はこのまま下がります。朝まで二度とこの部屋には参りません」

最後通告。決めるのは、私。

沈黙が落ちた。雨音だけが響く。

私は姿見の前に立つ自分を見た。バスローブが乱れ、鎖骨が露出



し、触れられた首筋が上気して赤い。目が潤んで、唇が開いて――  
。

(この顔、もう「大丈夫」って顔じゃない)

鎧が割れている。

柊の背中に向かって、声を絞り出した。

「……しゅうくん」

「はい」

「行かないで」

四文字。柊の足が止まった。

「――今夜は……甘えても、いい？」

声が震えた。二十年間、誰にも言えなかった言葉。

柊がゆっくり振り返る。完璧な微笑みが消えて、剥き出しの感情が一瞬覗いた。すぐに微笑みが戻る――けれど、もう同じ微笑みではなかった。

「――かしこまりました」

その五文字が、合図になった。

ドアの鍵が静かに回る音がした。

顎を持ち上げられて、唇を重ねられる。最初はそっと。コンシェルジュの指先みたいに丁寧に、唇の輪郭をなぞるような口づけ。

次の瞬間、舌が入ってきた。深く。甘く。十五年分の空白を埋めるように貪るその舌に、息が止まった。

「んっ……♡」

唾液が混ざり合う音が、静かな部屋に響く。

じゅる……♡

柊の舌が口内を搔き回して、奥歯の裏まで舐め上げた。呼吸ができない。苦しいのに、離れたくない。もっと深く、もっとこの人の味を知りたいと身体が勝手に求めている。

「っは……♡ しゅう、くん……♡」

「——申し訳ございません。もう、加減が効きません」

まだ敬語。なのに声が掠れている。

バスローブの帯が解かれた。柊の手つきは丁寧なのに止まらない。肩から布が滑り落ちて、上半身が露わになる。

「お美しい」

敬語で裸を褒められる破壊力に、頭が痺れた。恥ずかしいのに、その低い声が身体の芯を甘く疼かせる。

柊が跪いた。私のお腹に唇を落として、胸の谷間まで舌で辿る。乳首を口に含まれた瞬間、腰が跳ねた。

「ひっ……♡ し、しゅうく——」

「強張っていらっしゃいますね、ここも」

乳首を舌先でちろちろと転がされながら、もう片方の手が太腿の内側を這い上がってくる。

ちゅる……♡♡

乳首の先端をじゅるっ♡♡と吸い上げられて、甘い痺れが胸の奥

まで広がった。歯の裏で軽く転がされて——カリッ♡と引っ搔かれる。

「ひんっ♡♡ やっ……そこ、敏感……っ♡」

「ここですか。——承知いたしました」

丁寧語で弱点を記録しないで。なのに声が甘くて、身体の奥がぞくぞくと疼く。

柗の指が太腿の内側をじりじり昇り詰めて、下着の縁に達した。布地の端を指先がなぞる。もどかしい。焦らされている。分かっているのに、腰が自分から傾いてしまう。

「こちらは——もう、お濡れですね」

敬語で身体の状態を報告しないで。でも——その声が聞こえるたびに、おまんこが勝手にきゅうっ♡と締まってしまう。

「やっ……見ないで……♡♡」

「見ております。お美しいので。——お触れしてもよろしいですか」

「……もう触ってるくせに……♡」

「まだ、触れておりません。ここに——直接は」

下着越しにクリトリスをくるり♡となぞられた。布地の摩擦が焦らしになって、身体が勝手にびくっと反応する。

ぬる……♡

愛液で湿った布地の感触を、指先が確かめるように押し広げる。

「お客様。——ご自分から、お求めいただけますか」

もう抗えなかった。下着が濡れている。この人の指に、おまんこがどれだけ蕩けているか、布越しでもバレている。